リ 8
5488
4

門り8
號 5488
冊 4

東京帝國大學圖書館藏書
35.2.25

海外新話巻之四

賈人張鴻制衣虎尾陣圖事

浙省の所屬密雲縣の賈人ホ名ハ張鴻とゝ云ふ者あり年四十余此者已ゞ店上ホ古器古物ホ墨てこれホ鑑定して產業とゝ年生来文字ホ学び又武藝ホ習ヒ然るホ不思議なる哉去年以来英吉利國の老人海邊の清城ヨ攻入毎度合戰あれ共方敗北をと聞きこれホ深く憂ひ何ぞ一人數日門戸ホも出ず獨り端坐してありけるゞ竟ホ英吉利人ホ敵對一極て勝利あるの陣法ホ考へ出せり依て自らこれホ紙上ホ圖写一他人ホホさんとまれども

元来無学の性質なれば胸中の文ぶも筆ふ字をと絶
ぶて依て同村の画工那老二ふ招ぎ来り已が胸中ふ存ぶる
所ふ若陣図ふ寫しめ又書生趙徳二ふ托し思ふ処をのべ
文を作らしめるふ即其図解あり徳二此陣名ふ何と定
めるぞと問ふ虎尾陣と名くべふ由答へられば徳二即ち虎
尾陣図の四字を上ふ題ぶ張鴻い陣図の就ふ喜び趙徳二
那老二の両人ふ向て厚其労を謝ぶ右の両人も此陣法を以
て甚奇なりとー芸ふ歎賞して去ぬ後数日あらく張鴻自
ら軍営ふ参り右の図ふ総督裕麟ふ獻呈せんとふ結
総督これふ閲て大ふ奇なりとー委員ふ命じ直ふ張鴻と

已ぐ前ふ名出ーぬ張鴻い右の陣図ふ捧呈ー一云ふも發
せぶ退去せり就て総督其図ふ披き其解ふ讀るふ如何
ふも英人と對戦ぶべきの陣法ふて馬隊ふ設け火器を多
くぶ其法黄帝の握機孔明の八陣ふ合ー戦闘ふ臨で運用
の駿速猛烈なるを一度虎の尾を履ふふ回顧して直ふ人を
咥ふと云へら機勢を含まれば虎尾の陣とふ名づけーなん孫
武子の兵勢篇ふ於て其勢険其節短ーとあつく別ふ陣
法い説ざれた勢の険ふ節の短きふ全く陣法の極意なり
と張本学の語るも此虎尾陣図を沿て益発明せりとて
総督い深く感賞して岌ぶ叔其陣形図図二層あり内

層の圓徑二百間圓九百間とす歩兵二万七百人を備へ大小の鉄砲を雜投中層の徑六百間圓千八百間外面〻八門を開門の間毎小騎馬一千匹合て八千匹を備へ外層の圓徑九百間圓圓二万七百間歩兵八千一百人是小又大小の鉄砲を投く外層の外列より三處の備あり毎隊一百間宜小三百人の精兵を撰用ひ種〻の火器投くむ毎隊の火器猶大なるものを以て城壘車より仕掛運轉より便利〻む又其外より溝を堀土居を築き廻らし數處より門を開く元來此陣法かゝの數を以て圓圓を分一四の數より〻重層とす陰陽の両數を布列の間より胎青の妙變を隱秘の中より分列敵と相戰小

虎尾陣圖

壕塹

騎兵八千

騎兵一千一百人

騎兵三千七百人

騎兵三百人

精兵三百人

精兵三百人

圓徑九百間

圓徑六百間

圓徑三百間

圓徑一百間

及ぶべき方八面觀如ぶ兵とあり前と有り其余寄兵と有り兵法とあり之窮の変化を存せ実ハ攻守兵術の陣法と湯つべー
嗚乎妙なる哉或いは天清國の將帥屢敗を為る後ハ
一箇の賈人ハ假りて此良陣法を製出せーむるのみん乎

噗嚕喳再陷定海城事

既ニ今年の春両軍一旦和睦せーハ英夷此定海の
島地を清國ニ返還ー上陸する衆孝退ニ退船せり然れ
ども廣東鵜片煙の交易旧の如く許容ー且又紳ニ背き
動ぜれば戦用あるハ以く英夷利王新ニ噗嚕喳といふ者
ハ命ー義律ハ代て総大將とー猶又船軍を増加へ清國

の城地ハ攻陷ぜべーとの計策多り此由程ー清國ニ図へ
ーとべ撫兵葛雲飛を始め其他の諸將士定海ハ赴て防禦
ハ厳重ハー今ハ新の船軍押寄るると相待所ニ八月
十三日午の刻計ハ夷船十三艘竹門山の下ハ馳る繼て
蒸気船二艘又極て高大ー軍船一艘大將噗嚕喳軍師
嗎喇嗹ニ乗ー鶴ー て綿船ハ指揮せり其余沖合より馳来る
夷船の帆影數を知ーも城將葛雲飛い綿將士ハ下知ー て
海岸一帯の墓場ハ陣を敷ー且又城の内外ハ士卒を分布
ー旌旗を伏せ火器を備へ静りて以て戦ハ待居ぶ夷船
一艘湊の内ニ向て飛ー疾進入るとれ共見て葛雲飛墓場ニ

馳せ下り士卒を下知して八千斤の大筒八挺を張業竜巣にを垂べく打放ち甚だ悪く敵船を打貫き既に火業頻に火移ると見えしが一瞬の間に破裂して甚だ海底に焼沈めぬ嘸嘸喧しを見て大に憤激し聖十四月早天二十余艘の軍船を進め一文字に排並べ蒸雲飛の陣屋を掛らり甚だ勇猛の猛烈なるに怕れ清兵一時に敗北し彼方こ方の大なる岩穴の間に十人二十人宛身を隠されば見て取るべき此ときに考人数百艘の艇舟を以て行嶼山より上陸せんと偶慶列の総兵鄭国鴻三千の兵を率ひ此地に到着せしが考人の上陸を見て直に士卒に下知して刀捨を執て衝懸る考人未だ

全く上陸せざれば清兵所謂半渡の撃の利を仍敵に水陸應援の備を失ひ敗くに付られ是所に異に多き者数を知らず斯て清兵の気勢益盛なりれば英兵甚攻めぐを進も容易に付入ること叶はずと雖も陸地を隔つる五奎山に拠て一夜の間に陣屋を建並べ持久の計を為んとを鄭国鴻下知して同敵五奎山に攻るとえい味方の大害なり数々打勝べしとて士卒を土居の崖より角先仰げて打懸さりしに考人等甚陣屋を棄て退去せり十六日に至て英兵二千余人右祥門より進を東滝浦に攻鴻又大筒を撃くとれを防ぐ其玉大雷の激するが如く英兵の隊伍を打乱し火気地上に迸飛して暫も

同断ゐ〜夷人これゐ辟易し一度は一歩も進得ぬして引退し暁峯嶺竹門山の二處をして攻にとを國鴻又く大筒を放て防戦し黒白の夷五百人耳う整倒せり黒白夷人蒸気船十艘を馳て又暮雲飛の陣所に向て攻寄る雲飛もづゝ震天雷といふる火器を打放ち敵船二艘を焼亡せ此時英将噗嘣喧〻連月の戦用は討負如何とも攻入の術無失ひ今〻軍師嗎喇嘶の計策に従ひ三十艘の軍船をして二ゐに分ち一ハ五奎山一ハ東港浦一ハ西面の暁峯嶺より攻上る頻て暁峯嶺の敵一番み上陸るゝれば寿春縣の總兵王錫朋先陣と為りて二千五百の勇兵を率ひとれに當る夷人連日の戦ひに打負深く遺恨ゐや思ひ入こを

二、せこと進を寄せ大筒小筒打放り清兵数百人暫時の間に血潮り飲て整倒さる今我必死の戦ゐれば何〻にてあらうべき死人の上に屍骸を乗越押迫る斯て敵味方相共に鉄砲を繁く打懸るゐより何れ法の勝負ゐ〜ゐ見えざりる此時清兵の鉄砲新に我入代るゐ隊ゐく余り連發せ〜ゐ依て其火気筒より逸入一度に紅色ゐ変ぜ今一度装某せば其激發〜彼ゐ味方の大害なれゐのみ士卒為如何とも絶方なく皆〻紂死と覚悟なきゐ夷人より打懸る雨のごとく鉄砲玉の中より我投ト三百余人の勇兵刀を把て衝入り右往左往ゐ崩れ切て廻り黒白の夷百四十人殺戮せ王錫朋い士卒ゐ先立合

戰ひ其矛槍を負流る血泉のごとし之を指して考八人士切倒ひ敵の鉄砲四五發受て快討死をぞ遂ぶける外に
ふ士卒と互に思て同じく枕を討死せり英將嘆嘆嗟へ五奎山
より竹門山に攻よる鄭國鴻力を尽し一數刻戰ひ疲えて
今の數日の戰闘に疲えて働き得ぬ暫時力を杖に休息せ
ける處に一箇の天砲鳴渡つく其傷に落碎け國鴻の全身
爛して地に倒る士卒一人馳來り其屍を取收んとしるに又一
箇の砲丸來り落て國鴻の屍と共に打碎られ其最後をぞ遂に
げる葛雲飛も東港浦より城に向て攻來る敵と合戰し五勝
或は逃亡或は討死し今は唯一騎敵に防ぐべき力なく東嶽

廟の傍なる池水の中に身を投じて死せ徐桂馥も其身に重
傷を負ひ殘る士卒を纏め城中に入て四方の門を閉
塞ぎ矢石を備へ防ぐとへども事の愈危急に迫る故寨
主史鄧鈞に命じ糧蓄の余金九百兩を縣令の印一
顆を託し海を渡り鎮海府に至らしめ桂馥城陷るの
時に打て自ら猛れて死よとの此度の合戰初の數日は清軍
多く勝利を得るとの人ぞも会の衆寡敵し難く加るに海外の孤
島なる故に味方應援の会ることも忠勇の將士一朝に討死し
清國明州の要地を以て再び逆賊の手に渡せしこと口惜さよと
関者切歯流涕せざるいなかりける

海外新話卷四

海外新話卷四

掘出諸葛孔明所建碑石事

河南の汲縣ふ一寺院あり三四年前より四方の男女老幼貴賤紙別を此寺院ふ會集し晝夜の隔なく念佛樂番せり今年ふ至て益盛なり既ふ已ゞ產業を打棄て數十日爰ふ止宿して已ゞ家ふ還らざるの輩多し此由府城ふ聞えしかば官て天僧幻巫の徒を遣はし嬈惑唱導して金錢を奪ふとも其實て官吏ふ命じて汲縣ふ多く紙を其事を檢察せしめしとの沙汰あり依て官吏其地ふ到り見るふ男女老幼千余人寺の境内ふ集會し名々念珠を持し高らふ佛号を唱へ寺内木尊ふ向ひ拜まるのみ數日爰ふ至て探察せと雖も

池の異事なし就て官吏い直ふ府城ふ立帰り其由を總督へ云上を總督即ち又委員の者ふ命じ兵卒數百人を率ひ其地ふ至り寺僧を招き會集し居る所の者共尽く是を捕へ且其寺院を破壞し平地とするべき由也されば委員の者い直ふ數百人の兵卒ふ武器を執せしめ携へ彼ち門ふ入て見けるふ境内空虛として一人もなく西方ふ向ひ既ふ退散せる樣子あり依て皆く不思議の想ひなし此上い總督の命ふ任せ先寺院を取拂べしと其屋を破り其殿を毀ち有所の佛像什器ふ至るまで尽く燒棄し且寺後ふ一の池沼あり是亦埋却して平地とするべしとて傍なる

土居殘毀ち其土を以てこれを埋めんとせしに偶其土居の
中より碑石一度掘出せり碑の背面に諸葛亮建の四
字を彫刻せり其石質頗る堅實加るに土中にて歳月
を歴られば碑面の記文漫滅せぞ字〻雜ぜべ然れた
文体奇古怪僻句〻謎語に類し其意を解釈せげるこ
多し今ら此に載せ

細々紛々不見天　憂愁空在二九年
三光上邊無日月　十月山中埋銅錢
五四方知五四歳　兩地方知兩山河
三七才郎三九病　二八姣娥二八歌

無病老者分世界　前水後水打破鑼
狗猪之年還猶可　鼠牛之年没奈何
來騎江水三千里　東魯衣冠染血舖
羣生要見同姓支　壬虎之年定干戈

林朝聘諭大義銀虎船事

餘姚縣の居民等去年米戎人の乱暴に恐怖し戎船の
帆影遠見るや否妻子を携へ家財を搬び縣中の人家
殆ど空らんとせ折節春の半なれば桃李爛熳として
東風に笑乱れ一うぶ誰一人これ賞ずる者もなく詩人嘉
祐ぞ野桃自叢空流水江燕初歸不見人と詠ずるも

其孔後寧察の風京今さらう斯と思ひやられさう扨道光
廿二年皇国天保十三年二月廿一日最大の軍船二艘白帆ふ風を打
孕み花ゞとくふ入津さとれ我見て公卒の分倫諸将帥皆く
色狼失ひ又ふ何るる幸きふ月ふ出逢らんと城中上城下へと
逃一騒ぐ此時代理縣事林朝聘い奮然として諸将ふ
向ひて曰遂者の軍船僅ニ艘入津せるとて更ふ驚くふ足ぞ
我自ら彼ゞ船中人家迄将ふ對面一大義を論一此湊城
退船せーめんと水勇去人通車一人引携へ汀ふ繋る家ようも
彼きふ船ふ打ち乗拝狼搖一楫ふ取り敵の大船ふ迫り
縄梯ふ狼攀易くと乗移り船中ふ見廻せば黒白の我

人ふも数十人鈔付筒の火蓋ふ切りふぎと云で一打ふせんと
彼方此方ふ逃へさう又檣の上狼仰ぎ見る不大なる石火矢を仕
懸ありて今ふも頭上ふ落るやうんと怪る其外鈔槍の類数
千本ふ並べて厳重るる有様るう斯て朝聘い戎将ふ對面
致一度自通下るふ戎人答て今下の殿ふ移て新ふ鑄造
る不の石火矢狼試發せんとも仮て暫く寛ふ和へ給へと云
るふ朝聘敢て聞入ぞ自ら将帥の居間と覚しき所ふ
向ひ進む早脚下ふ打て右の石火矢を發せう其声大雷の
裏くう如く船中ふ振動一海面ふ響渡りあ足地と離れ
其身二丈余も空中ふ躍るとぞ覚ゆ斗りるうかう附朝聘

激由動せば勇気凛々として逆将の居間へぞ入りみる見白の
老人どももなほ汗流拭ふ何なる事と出来ぬらんと後ゆ和
へを見物せ朝聘庭みなき容典厳正ゆて大義を挙て徐一
るい汝等西洋の僻境より出れ仁義五常の道知解へさ且一走
我公猪狗費せと甲斐なるらん然ども汝禽獣ゆも非ざれば私
心を去て順業せよ元来戦国の由如尋るゆ中華ゆ向て聊
侵犯すべきの謂れなし既ゆ乾隆嘉慶の間ゆ至て屢鴉片
輸出禁止せとの令汝ら国の奸商禁を犯して持渡りその
根源を絶と欲ゆ因て去年林則徐広東ゆ於て厳ゆ旧
政ゆ従ひ数万函の鴉片を焼ゆて其法既正なり如し百年来

禁令下れ日ゆ重て再び持来ると雖何ぞ我人民これを喫
食せん亦何ぞ欠金あらん今日交易利なりとして種々の偽
言を為し再中華の財宝を奪んとて干戈を動し船の堅
砲の利なるを頼み生霊を残害せ支理を弁へざるの
甚し去年伊里布の計ひの依り広東の地ゆ於て講義義
律と相会ゆ和睦ゆ約せしかども後一月ならずして汝ら国の
夷民我領有の厦門ゆ擾て再び海戦陥れ我海運を妨
ぐ汝ら国王の慕逆挙て数ふべからず今又此地ゆ数艘の軍
船を向し何の為ぞやと雄弁風然生し頭髪冠を衝き
返答せば一撃ゆせんとゆ剣を按し居丈なるゆて答ゆ

る逆首は其言の理あるを伏し一言も發せず面色赧然として
居たりる朝聘は勇気大船より充満し我言必ず忘るゝ勿れと
汝が國王に告よとて直に其坐より傍なる異国の戎人
たちに用の品を又小舟に乗せ難なく城中へと帰りけり
戎人初めの程は餘姚縣の將士戎狄ト數艘の軍船にて
以て一撃にせんと思ひけるが豈計ん林朝聘が勇気凛然と
して警備一二艘の軍船一時に帆を開き何處とも多く退
去せり嗚呼諸者の大胆逆戎を畏るゝ虎の如く動もすれば
戦闘を避和議を以て其支度了んとせ此時に當て林朝聘
國家の爲に身を忘れ一寸の舌を振ひ鉄城の如き堅船

數艘を退けしは実に宇宙間の壮事なるべし

鎮海生員王師真燒討戎船事

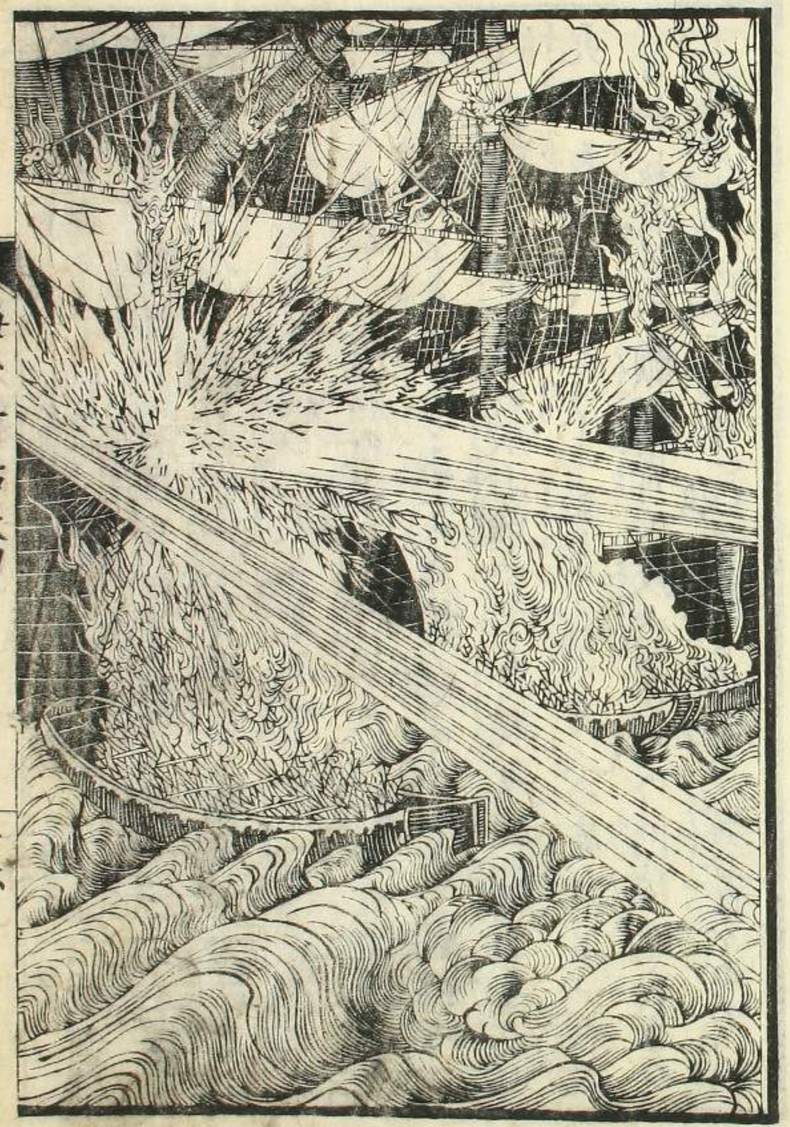
去年八月逆戎再び定海城を陷し衆戎爰に據し
後は清國東北の海岸暫も静謐なるべき就中鎮海
縣の如きは定海と相距ること近き故以て逆戎の大軍
船十艘二十艘宛常に港内に入て陸地を掠せり依て
居民の騒動日として休まず巡撫劉韵珂同知葉
筮相共に心肝を碎き如何して戎人を討懲し再び逆
海の船を寄る事なからんと日々其評議ある不
當慶の生員王師真と云者あり戎船焼討の

奇策を以て業績を示さんとす我関ヶ原の頃霊便の良法なるを以て又これを以て翠河の墨を翠河
示大なる喜悦一直ちに師真先白状一其策を施行せ
べしとの由なり是を於て師真先郷勇二百人水勇二百人
を撰び募りこれを以て小船数十艘を分配一別に焼船
十二艘を仕立一此焼船二方を設くその一方に船中に柴薪を満載一火
火薬嚢の為る處に向ひ艘長短宜きを後て貫達せ其中に進ず火を通
一此道に火の尾を一處に集め又これを樋の中に通一船の舳に向て出
るの臨に其尾に火を点ぜ其火を埋蔵一其樋に入れ又樋に於て盛
て是に炭火を埋蓋一其樋を以て右の火薬瓶を中に一埋るなり左も
其樋に機関を仕掛此處に其端に解るるこの樋中の火瓶内の火薬に傾覆せ薬激発せ
艘ごとに知ひ多て六艘とするを即ち昨日より湊内に来船七

艘定泊一あるべ先を直に焼討せんと二月廿五日斜陽西
山に没一水烟の起る後に師真緒船を解ひて漕出
せ廿五日のとなれば夜に入て空に掛る月もなく水面
茫々として物影も定まらぬ依て暗に風に乗船に向て
漕進づる上流より第一艘の焼船に火を掛敵船七艘
の中位に向て流一より折節潮の勢に従ひ自然と
船に流れ着相磨割して数十の火薬瓶一時に激震一
其声百雷の轟き大光烈電の逆ごとく忽ち敵船二艘
に燃付て帆を焼檣を倒せ黒白の老人と童子救んと猛
火の中に来て喚叫ぶ紙鳶一是紙集一働き得ず

志て水中ゟ投溺せ其時王師真金を鳴し一鼓を撃ち
大軍の押寄る氣勢を示せ支人等これを関く益周
章し殘る支船後を引上るゟ悉く数十艘の端舟を
投棄し乗て戦いんとせ師真又第二隊の焼船を流し
進む支人其焼船を見て彼奪ひ海水を以て
上ゟ洒ぎ柴草を湿霑せしめんと迫づたる支人船ゟ出さ
る様水ゟ艦を れば彼火柴直ゟ燃發せり支人等幸して
逃去んとする所彼水勇郷勇相共ゟ力櫓を執て三百余
人殺戮し同青ゟ勝鬨あげしゝ英夷の大船ゟ れを
援んと又〻沖合より馳至る然れ共潮水既ゟ退き其

進退自由ならずして有る彼師真又第二隊の焼船を以
て大砲点ぜ支人と戦ひ打殫んと数十挺の石火矢を連
發せしゝ何して湿りけん已ゞ船中ゟ富る火柴ゟ火移ると
見え清兵の焼船迫迫ゟ彼も待ず其大船一瞬の間ゟ
破烈して片板も残らず微塵と成て飛散り斯て其余
焼残る大船稍湊ゟ退き必死を極めて戦闘せんと火
煙の中ゟ立て二、三大砲を打放つ然れども火煙水
面ゟ吹満て其見當さへ仮て其王清兵の船ゟ中
るを更ゟ一時師真数十艘の小船を四方ゟ組と漕
開き敵船中ゟ取り虚砲を多く打放ち金鼓を撃



王師真燒討夷船圖

縣波茂作りしうび戎人火焔の中ゆを出て咫尺茂弁せ
勢の多少船艇の模様も見分難く何へ何くと向ひく
戰ふべき術なく危くして此湊茂退去しぬ斯て五時真い
頽め殺る而の焼討の一策其度ゆ叶ふる茂喜び殺の未ざ
明ざるゆ茂ト緒船の水勇卿勇茂ゆ纏めて退還し即
ち其人数を点検するゆ一人茂損傷するとなし数刻の合
戰ゆ敵の大軍船四艘小船四十余艘茂焼燬し戎人の
死傷数茂知れ難き後十余日の程い戎人の屍骸共ゆ焼殘
る船枝岳巡の類漂寄て湊内七八町の間陸地となるを
王師真戰功の莫大なるを以て新ゆ六郡の官爵をあつ茂

ゆ蠱船茂載く王茂新容せらるを又水勇卿勇茂ゆ
ゆも各厚き恩賞ゆて与すぬ

官軍退治定海虜人事

此頃逆夷の大船鎮海縣ゆ拒て不意茂焼付せられ大ゆ
敗北なしゆれば其遺恨益甚く依て崇明乍浦上海指宝
山等の諸地ゆ向て攻撃せんと定海より軍船茂進發する由
聞えれば清國の諸將舎織なして白く叔い此節定海ゆ佑
擾する所の戎人ゆ定衆くうぢなべく先其虚ゆ乗ト急
ぎ定海の城地を取戻し波ぎ巣窟茂掃ふべくして叔の
慶州の総兵鄭國鴻の子校把捻所大使鄭鼎臣ゆ命

一万余人戎卒ひ宣海より渉うむ鼎沸大小喜悦して日
逆戈去年八月宣海戎蹈るの日紀我父國鴻大砲の
下より討死せり幸なる哉我此度こそ其地に於て逆戈を
一戰の下に討伐し仇く君父の仇戎雪めんと即日數百艘
の名船戎沖ひ海門縣より叢船に宣海より向ひる斯く
三月四日梅山港より着船せり先此處にて柴草戎刈取三十
艘の船に満載し油戎甚しく洒ぎ燒船戎結ひ且又所
候を叢し戎船の有る戎探らしむるに紀毛港嶋崎の麓所
に数船の大軍船碇泊するの由なれば早速これ戎燒討なる
べしとて進て十六門より乗船戎ろち七隻とる紀毛港

小向ひ之艘の戎船戎目掛風上より燒船十余艘小火を
流し進む戎人これ戎発見戎打砕て大船を水車もて
放間に宮会小向くる石火矢を輪叢を宮会これに依て迫迫
ぐる能はず烟に巻まれて漕隔て燒船戎捨へる後に逃
避るの時既に流れ所の燒船敵船に流れ着るの火帆檣
に燃付と見えしが忽ち船上に黒烟吹起り戎人の狼狽云
迚に尽し難く只端舟戎擢命し我先に逃去んとするを
武拳蔣忠清なる者小船を以て飛が如く追迫り火雖
投難これ戎避んとて数十の端舟互に觸當り夷人
等二百人自ら海中に溺没せり其時又一艘の敵船進を

李宮会の船陣を目掛けて向ひく紮く石火矢を打放ち
ければ甚玉前より倚る焼船の柴草に轉び落て此方へ届
ざるべき負者終に為ん遺恨と思ひ我人往き船を漕
回して打懸るに其勢破列して已が船中に火気の焔に激
射し甚大船忽ち海底に焼沈こそ幸めて生殘りし黒白
の我人端舟にて竹門山の方に逃去んとしるに水勇の長袁
高栄尽くこれを捕へて海中に投込ん此時蝦蟇山に掛れる
最大の我船一艘力を合せ援けんと馳来る是を見て千総韓
端慶王廷数萬並に水勇の長李世茂火攻船二十余艘を率
ひて一齊に押進む風に乗じて火を放つ然れども我船敵て是

を恐れて益進を来り右の火攻船を海面に乗沈めんと
車輪の蟷螂斧如く遥半乗梨一らぶも絶て其
火檣に仕掛る繩掛を焼切て我人等これを打消す
漕ぐ惟宮会に對し石火矢四五發打発るのみにて
既に檣倒れ船裂て我人等尽く海中に溺没し大魚の
粮とぞなりける軍功頂戴成功把縄羊大弁の女人
い前日より定海の城邊に出て我伏し我人等上陸
せば是を討取んと待居けるが海上に退く火の光揚り
船望見て我船尽く焼亡し官軍の勝利疑ひなきこと
を察し会城外の我営を焼拂ふべしと慶る火を

ゑみ黒白七隻人数百人ばかり生擒る翌日鄭鼎に清船
ばかり引纏め定海城より盛成功羊大升の二人ふ出舎
し海陸同日小勝利を得て祝し酒有て没て大
会士ばかり後数日を経て城北の江奎山より夷人の
屯営あるを聞き綿将士相共に山上より登り夷人三百余
り生獲し万国地図西洋兵書及び大小の鉄砲四百挺
をも捕て此度焼討する所の大船四艘端舟三十余艘を
人を殺すの数多く而て官兵の死傷僅に二十人に
過ぎざるなり

乍浦落城并虎人乱妨事

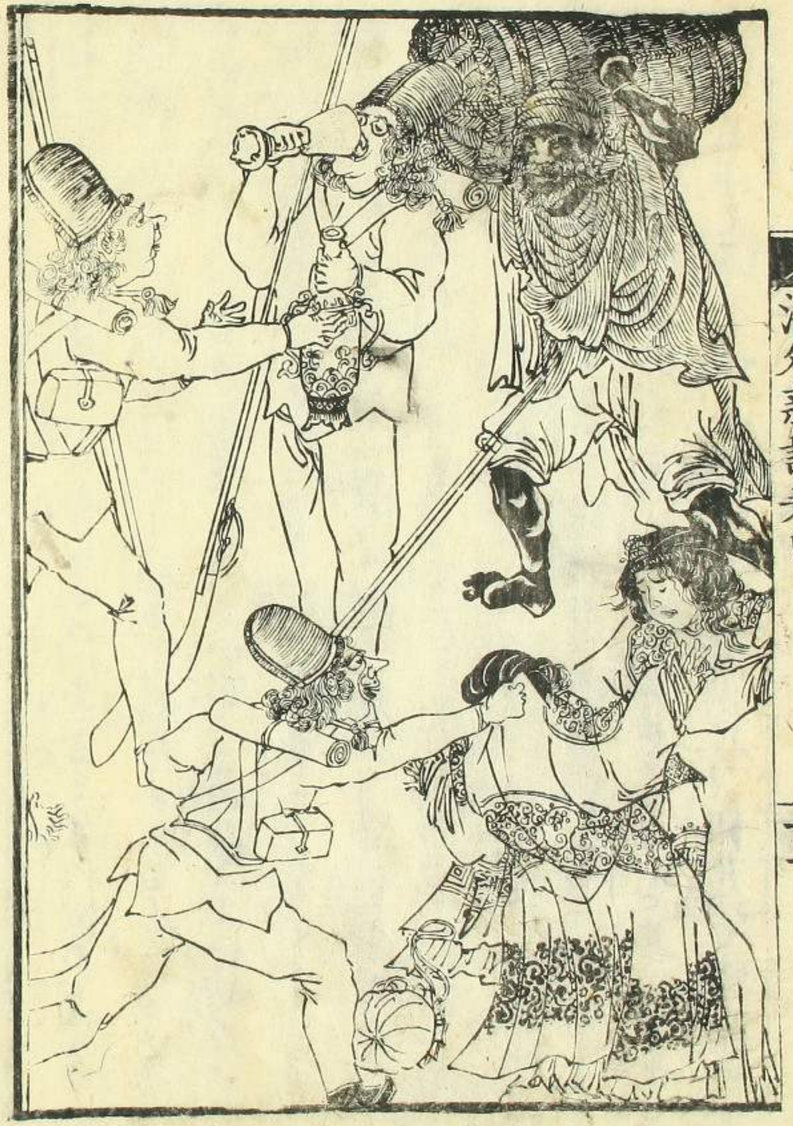
乍浦城内の将士は不日小噗鼎査曜華の大将大軍
なれば攻寄せると聞き知何るる臆病神ゲ付さうろん鶴唳
風声も敵軍の押寄ると覚へ其心中安からぬ故に緒
門の会士城の内外に充満すれども甚強色見苦く
武者ぶるみの声ぞ多くする四月朔日の早朝の蒸気
船一艘湊口に指て馳る端舟を命じ水底の深
暗礁の有無を測量せり土民等是なを妻子を携
へ家財を搬び夜なを出て逃げ何慶もあり迯去ぬ同月
八日果して山のごとくなる大軍船六艘蒸気船六艘都合
十二艘の船湊に向ひ帆を入るこれを望て

中あいて騒ぎ我先に逃落んとて道路人のよる人重りて
死折重死折取捨る武器物具に馬蹄の塵に埋れり聊
耻辱死知る将士海岸の臺場より敵船に向ひ数十
挺の石火矢を打放けるに甚心中既に動揺する
あや敵味方の間合遠くして甚玉の届ざる所も揮ふべ
き二町ほどに打出せり此時夷人等檣の上に出り望遠鏡を以
て城内の逃る所望見て直に朝るもあり又は空く玉薬
を費さぬ咲もあり斯て此日は合戦に及ばず翌五九日の
早天敵船一齊に岸近く打寄二重三重の鉄砲狭間より
黒烟起て打懸る甚玉岸上の臺場を撃碎き百雷の東

渡るごとく霹靂空に閃き金蛇地に逆り上へ悲想天下に
金輪際の底まで通るやうにと戰ひこれに恐怖して城
内の将士誰一人進戦するの気色なく唯に副将港公満
の兵二百人を率ひ城を出て陸家街の傍に埋伏し夷人
は遮て待て血戦せんとまち果て逆巻五百人唐家湾に
上陸し城の南門に向ひ攻入らんとて陸家街を過けれ
ば副将公満ことに接戦ようとこれを狭て左右に徑兵
急に対てかゝる夷人大小狼狽し銃弁筒を放て障ぬく
満兵の捨先に突倒されて二百余人斃る何の間にか
あらん夷人の一隊城北の山上に登り大旗一本押開き

何ぞ一人相図すると思えども又、本船より数十人大小の鉄
砲を携て飛よう疾く上陸し仕掛の者に向ひ射て懸るもの
時敵い新なるわれば其勢潮の湧出るが如く更に防ぐ暇き
術なし満会とれて恐れ少き色めく所我間将仕掛下知
て因ぬ何に敵新なるらて西洋僻境の戎夷何程の事
ある一人も逃さぬ打殺せと満会号令に乗じて進む
月知覚を程の合戦せんと名く討死と覚悟を極め奮る
を幸切て落る戎人等怯へる一先此地を退き鉄砲を向く
打まくめんとて満会先刻ようの戦闘に力竭戎人の退口を
直に追蒐を能ぞ暫時一度とかく息を休むる暇に

戎人ども大の天砲を以て打ちかけられば其まま会の陣の人ども
為砕け大き四方に激裂し硝烟耳目を塞ぐ一時に打砕れ骨肉微塵と為く空中に飛散る此時法公
も又半身火気の為にひらん甚然れども勇きもんぜんとして
残る士卒四十人を携へ繁る敵に衝入て其最期を遂る
る城門の会士迫く何度へ近落られば逆襲二十人既に東
門に乗込んとし水師福部続長喜同知章章逢及び張
惠周恭壽の諸士相共に優れる士卒を引纏め乗入て
隊伍を乱さんと各駿馬に打跨りて向る戎人等甚驚て
入らんとすと地上に居敷き箭さの鉄砲を構て堵牆の



黑白虎人亂妨圖

如く立並ぶよりく諸士直ち馬より入るを躍いまだ知らせんと
厨著する所に周恭寿直先に一鞭あて家の郎ぐ武人に
馳駆し馳ちく大軍の中に入る度毎に家の其隊伍の
乱るる所に長喜年逢張惠の諸士刀槍に把て同く池入
必死とのりく戦ひ敵百人余を撃取る時に恭寿敵ようう
打放つ鉄砲に当たの負れ墨ようう下に倒と落馬地
ふ間に息は既に絶名と思へるに又く敵よりう攻来る敵に相
自ぞう自義二人恭寿人と切倒し甚身終に死に成ふ他の
諸士も敵に迫押らんと心は矢さけふ思へども残れる兵卒皆
深く成頑働き得ず味方の兵これに敵に比まれば九牛の

一毛大倉の一粒なりて如何とも終方なく危くして此場を引
退き相共に胡兵城の中に引籠ふ都統徐雲は既に
此處に立て自ら刎くく死をとれ成ふて諸士同く其後に自
殺して其最期成るに斯て武人は一時に城に乗取又
城外の満営に大砲にて撃砕き南門外の人家に火を
うしぶ其火忽ちに燃延て北は吊橋より南は水陸戰神廟
飲馬池衛大神衛の邊に焼拂へり斯て逆
将嘆鼎査は一戦の下に此城地を攻取る成喜び立て城
内に入て会士の死傷成点撿し功勲を褒賞し数日此所に
滞留せり其洋間中黒白老人の孔方云者に絶さり同月

十一月銅役所より押入り其銅を尽く奪取り往又迯港に
掛る所の[redacted]交易の商船二艘を破壊して其船中の諸
物を掠取れり爰に最怜むべき天慶寺の静室和尚也
爰人皆此寺に入て静室和尚に對し揚子江並に黄河の地
圖を精密めり和尚其圖を所持せざる由答へられば爰人
大いに怒り直に和尚を捕て裸裟衣悉く剥取り躶体と
なし麻束縛して衆人中に伴ひて數日飲食を與ざして
嘲哢し又河定番の金家を爰人尽くこれを捕獲し
海塘の天后廟中に携へ去て先定番に薪水の労役を命じ
定番の一妻一妾二女並びて五人の爰人各自相配分して白盛

奸淫し一日ごと定番をして其傷に堪へざるを
且又黒洋のごとき物の不潔なるを日々民家に入て掠
所の米穀を炊きその半生半熟なるを船中に
場の大小便を受る所の槽に盛り其側に各圍坐して匕箸を
用ひず直に手を穀の内に攫食せり婦女數百人を捕へ来て廚下の
用に充つ夜間に乗つくり男爰相爭ひて其婦女を輪淫せり
悲哭の声聞に堪ざる者輪淫して命を失ふ者あれば直に路上に
掷棄て依て其尸戰山のごとく青燐夜燐鬼風盛に腥く間もなく
られぬ光景なり扨又噬鼎査に見えし揚子江に攻入り諸城を
焼取んと清会の取捨る大小の鉄砲其外刀槍弓矢の類

及び米穀金銭等ホこ到るまで悉く本船へ運び載せ同月十九日の早天より牛痘寄して天祐まろう船を発り祐祐まろう黒白の夷人殘らず引率して此處祐退船せり

烈女劉氏事

烈女名は七姑平湖縣学廩生劉心殷とのつる者の女之作浦城内ホ居住せ性質聰慧温和ゆて容色まさ美麗ゆう年幼より好て書祐續を頗る人倫五常の道祐悟り織縫の業人より勝れ傍ら又算法祐学得て能家政祐助けり四月九日作浦城陷るの日家族の婦女悉く祐逃んとする途中より於て祐々夷人のあるより捕獲ゆ流せられ其汚辱を清る者數祐知らず

なる人劉氏の親族敢て祐逃れ他より祐とまく運祐天より往せ門祐閉ぢを塞ぎ其家より居るゆ夷人等既より劉七姑の容姿美麗ゆうと聞て即ち直祐挑んゆ是夷數十人劉氏の門外より到り竊より其内祐窺うとせ時ゆ七姑ハ戸外の履声凛く祐聞く夷人侵入せるゆ知ひゆ祐家一刀を執て唯より當既より自尽せんとーゆる祐其父母祐懇泣して推阻む女の曰生て父母より俸養祐遂んと固より願所ゆう然れども不幸ゆて斯る祐世より出逢今や我身夷人の為より捕へられゆゆる支めて父母兄弟を辱めんとも計り難ー寧自殺せん幸の心安ろれと父母諸共より涙より自て有るとて又屋後の色離と

破壊する声すり起てこれ窺ひ見るに黒衣数人各鈗付鉄
鉋抓荷ひ此所より侵入せんとす依て父母女子携へて西隣徐
氏の家に逃る斬口くあり黒人これ察し又女を追て徐氏に
到んとす女の父母又徐氏の西隣陶氏に移る此時七姑の父母に
随ひ同く外に去んとせるゆ支の危急に迫り愈免るべからざ
る様覚り徐氏の家幷に其身を投せんとす偶思ふに礼に女
子は国を踰ぜざるも云り他人の家幷に我死すべきの地に非ずと
再び家に悲びて此慶を出已が家幷に走んとせるに今も
後に殘れる父母の安の心に掛り進んとすれども歩を陶
氏の門外に回顧するに父母早既に数人の黒衣に捕へられ

痛くうちきられ数人七姑自ら活て援んとせるに女婦女子
のみなれば其力なく如何いせんと不覺声を出し云ふ我父母なり
絶て放し数人と叫びるに黒人これ様国く云語の程い解せざと
いへども遂に七姑の姿を見てこれを捕んと数人の黒衣父母を打擲
まること様なり七姑自縛て逃来る其時七姑い急ぎ已が家に走
て早くも井中に身を投せり黒人これをうて大に怒り失ひ何愛
なもなく立去ぬ女の父母い先刻より黒人の為に打擲せられ一分
疼痛甚く暫時地上に困倒してありけるが今い女七姑のことを
深く案し筋骨の疼痛様支へ輾蒲伏して已が家に還
り彼方此方と女の所在様尋るに立ち偶井中に窺ひ雪の

雷微く露れ紅の衣袖湿ぶて太液の芙蓉西風吹多めく
僅十有九の齢を保ち未ざ字せざるに節義を守て死し
見るより早く悲歌の余り父母諸弟并姉妹に撃ちぐ頻に女の
名を呼ぶに親子の情感通せり未ざ息の絶ざるに棺前に
拳て低声に再三應へよと恰もべ此井水殊に濃く女の身を
投ずる時に歯て直に沈没する事能はず面低水に俯し連に水を
吸飲して黄死せり嗚呼義を見て身を棄るに丈夫も難んずる所なり況
巾幗に於て父母兄弟を辱めんと低れ苟も生低求るの心なく
死を思て必ずるべし豈古今に雙の烈女子ならずやや

海外新話巻之四終

ろくすきつナフリナノ。